

2025 年度第 2 回入学試験問題

国語

「始め」の合図があるまでは問題を見てはいけません。

注 意

- 1 「始め」という合図で始め、「やめ」という合図で、すぐに鉛筆をおきなさい。
- 2 問題は 1 ページから 7 ページまでです。
- 3 解答用紙は問題冊子にはさまれています。
- 4 初めに、解答用紙に受験番号・座席番号・氏名を記入しなさい。
- 5 答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 6 字数制限のある問題については、かつこ・句読点も一字と数えなさい。
- 7 文字は楷書^{かいしよ}で、一点一画でいねいに書きなさい。
- 8 質問や用があるときは静かに手をあげなさい。

一 三十歳の「俺」(浩弥)は、高校卒業後デザインの学校に通うが、就職でつまずき、現在はニートの状態が続いている。そんなある日、近所のコミュニティハウスの図書室に立ち寄る。そこで「俺」は司書の小町さんに『進化の記録』という本を薦められ、読み始める。次の場面はその翌日のことである。以下の文章を読み、後の問に答えなさい。

翌日の土曜日、久しぶりに電車に乗った。

高校三年生のときの同窓会があったからだ。いつもだったら絶対に参加しない類のイベントだけど、今回ばかりは行かなくてはいけない理由があった。

卒業式の日、校庭の隅にタイムカプセルを埋めたのだ。ハガキサイズの紙に好きなことを書いて。それを「三十歳の同窓会で開けよう」ということになっていた。

案内状には「欠席の方の分は、幹事が後日郵送します」と書いてあって、1背中がひようつと冷たくなった。封筒に入れて糊付けしてあればよかったけど、たしか四つ折りにして、見えるところに名前を書いたただけだったはずだ。

なんとしても、誰にも見られないように回収しなくてはならない。

タイムカプセルを開いたあとは、夕方からレストランで会食が予定されている。俺はそちらは欠席にして返事を出した。

十八歳だったあのころのきつと誰にとつても、三十歳の自分なんてとんでもなく大人だった。いろんな悩みも、三十にもなれば解決しているような気がしていた。

俺もデザイン学校にこれから通うという時期で、単純に嬉しかった。もう一生、苦手な数学も体育もやらなくていい、絵だけ描いていけばいい。そしてそのあとはイラストの仕事をしていく道筋が用意されているような錯覚に陥っていた。

「歴史に名を残すようなイラストレーターになる」

俺はたしか、そう書いた。思い出すだけで眉間のあたりが熱くなってくる。

自分の技量に自信があったわけじゃないし、そこまで本気じゃなかった。若気の至りというか、勢いというか、ノリだ。でも歴史に名を残すほどではないにせよ、絵を描く環境に身を置いてさえいれば、なんとか近い仕事には就けると思っていた。

卒業以来、十二年ぶりにくぐった校門。

校庭の隅の、大きなブナの樹のところに、もうすでにたくさん人が集まっていた。根元近くに「第十七回生 タイムカプセル」と書かれたプラスチックの板が墓標のようにささっている。〔略〕

「はい、では皆さん、揃ったようなのでいよいよ始めます！」〔略〕

ひとりひとり名前が呼ばれ、それぞれ手を伸ばす。開いて笑いだす者、見せ合っではしゃぐ者、大声で読み上げる者。みんな楽しそうだ。

将来の夢とか、好きな異性への告白とか、言えなかった愚痴とか、そういうことが書いてあるらしい。

賑やかな誰もかれもに、自信が見える気がした。三十歳。もういろんなことが決まって、落ち着いて、それぞれに仕事や家庭を持つて。あたりまえだけどここにはもう、高校生はひとりもいなかった。制服を脱ぎ、なんらかの形に2進化した大人がそこにあふれている。

ようやく俺の名前が呼ばれ、杉村から紙を受け取ると、俺は開かずじャンパーのポケットに入れた。よし、これでもう、用事は済んだ。ほっとして息をつく。〔略〕

翌日俺は、小町さんが言ってくれたとおりに、コミュニティハウスの図書室に足を運んだ。〔略〕

俺が行くと、小町さんが何も言わず『進化の記録』をカウンターに置いた。〔略〕序文の最初のページで「自然淘汰」という言葉が目飛び込んできて、どきりとした。

学校で習った。環境に適応できる者は生き残り、そうでない者は自然に滅びていく……そういう説だ。そしてある一文に、なんともせない気持ちになる。

「――好ましい変異は保存され、好ましくない変異は消滅させられる。」

好ましい、好ましくない。

それは誰にとってなんだろう。

ざわついた気分のまま読み進めていくと、「ウォレス」という見慣れない名前が登場した。ページをめくりながら、本と目がどんどん近くなる。

進化論といえどダーウィンだ。『種の起源』を書いたチャールズ・ダーウィン。

でもその陰に、もうひとりいたのだ。アルフレッド・ラッセル・ウォレス。ダーウィンより十四歳年下の自然史学者が。

ふたりとも甲虫好きの熱心な研究者だったのは同じだ。でもそれぞれの状況も個性もまるで違っていた。

財産持ちのダーウィン、経済的に困窮していたウォレス。それぞれ独自に、自然淘汰による進化的理論にたどり着いたふたり。

しかし当時は聖書の「創造説」が完全に信じられていた。この世界の成り立ちはすべて神の手によるものであり、それに異論を唱える者は激しく糾弾された。

ダーウィンは公表することに怯えていたが、ウォレスはためらうことなく論文を書いた。そこでダーウィンは焦ったのだ。

「自分が長年にわたって温めてきた理論の優先権のすべてを失いたくないなら、ついに公表するしかない。ダーウィンは覚悟を決めた。」

それまで躊躇していたダーウィンは、急いで『種の起源』の出版に踏み切った。そしてこの本と彼の名は今もなお、誰もが知るところとなる。

もやもやしながら活字を目で追い、ダーウィンについてウォレスが「私たちはよき友人でした」と語っているという一文を読んで俺は頭を振った。

……それでいいのかよ、ウォレス。

先に発表に挑んだのはウォレスなのだ。なのに結果としてダーウィンばかりが大きくXなんて、納得がいかない。

デザイン学校にいるときも、こういうことがたまにあった。俺の描いた絵をちらっと見て、構図とかパーツとか、真似してくるやつがいたのだ。画力はそいつのほうが圧倒的に優っていて、評価は高かった。パクんなよ、俺のほうが先に考えたアイデアなのに。悶々としながらも、一度も口にはできなかった。そいつに「俺だって同じこと考えてたんだ」と言われたらそれまでだからだ。結局、世に認められたほうの勝ちなのだった。

俺は大きく息をつき、次のページをめくった。

〔略〕

翌日は、のぞみちゃん（注 司書補で、いつもは貸出カウンターにいる。「俺」の

絵を好きだといってくれた。）が休みの日らしかった。

図書室に入ると、小町さんがどんと貸出カウンターにいてびっくりした。〔略〕

やっぱりさくさくとぬいぐるみを作っている。〔略〕

俺は閲覧テーブルに座って、『進化の記録』を開いた。〔略〕

自然淘汰。環境に適応できない者は滅びる。

それなら、勝手にすうっと消してくれればいいのにな。適応できないってわかっていながら、好ましくない変異なんて思われながら、苦しい思いをしながら生きていかなきゃいけないんだ。

俺自身にたいした力がなくなつて、世渡りできる器用さがちよつとでもあればうまくやっていけるのに。たとえ多少卑怯なことをしてでも。

そんなふうには思いついても、そうやって蹴落とされた側の痛みばかりがリアルに迫ってくる。光を当てられなかったウォレスは、本当にダーウィンを「よき友人」なんて思っていたんだろうか。

俺は開いたままの本の上につつぶした。

小町さんが抑揚のない声で「どうした」とつぶやく。

「……………ダーウィンって、ひどい奴じゃないですか。ウォレスが不憫だ。先に発表しようとしたのはウォレスなのに、ダーウィンばかりもてはやされて。俺、この本を読むまでウォレスなんて名前も知らなかった」

しばらく沈黙が続いた。俺はつぶつぶしたままで、小町さんは何も言わずにおそらく針を刺していた。

少しして、小町さんが口を開いた。

「伝記や歴史書なんかを読むときに、気をつけなくちゃいけないのは」

俺は顔を上げる。小町さんは俺と目を合わせ、ゆっくりと続けた。

「それもひとつの説である、ということ念頭に置くのを忘れちゃだめだ。実際のところは本人にはわからないよ。誰がああ言ったとかこうしたとか、人伝えでいろんな解釈がある。リアルタイムのインターネットでさえ誤解は生じるのに、こんな昔のこと、どこまで正確かなんてわからない」

こきん、と小町さんは首を横に倒す。

「でも、少なくとも浩弥くんはその本を読んでウォレスを知ったよね。そしてウォレスについて、いろんなことを考えている。それってじゅうぶんに、この世界にウォレスの生きる場所を作ったということじゃない？」

俺がウォレスの生きる場所を？

誰かが誰かを想う。それが居場所を作るということ……？

「それに、ウォレスだって立派に有名人だよ。世界地図には、生物分布を表すウォレス線なんてものも記されてる。彼の功績はちゃんと認められてると思うよ。その背後には、どれだけたくさんのお名も残さぬ偉大な人々がいただろうね」

そして小町さんは、おでこに人差し指を当てた。

「それはさておき、『種の起源』だ。あれが発行されたのが一八五九年だと知ったときに、私は目玉が飛び出るかと思った」

「え、なんで」

「だって、たった百六十年前だよ。つい最近じゃないの」

つい最近……。そうなのか。俺が眉を寄せて考え込んでいると、小町さんは頭のかんざしにそっと手をやる。

「五十歳近くになるとね、百年って単位が短く感じられるものだよ。百六十年なんて、がんばれば生きてそうでもん、私」

それには納得がいった。生きていそうだ、小町さんなら。

ざくざく、ざくざく。小町さんが無言になって、毛玉に針を刺しはじめる。

俺は本に目を落とし、ウォレスのそばにいたであろう名も残さぬ人々のことを想った。

〔略〕

たった百六十年前――。

それまでヨーロッパでは、生物はすべて神が最初からその形に創ったもので、これまでこれからも姿を変えることなんか無いって固く信じられていた。

サンショウウオは火から生まれたと、極楽鳥は本当に極楽から来た使いだと。

みんな真剣にそう思っていた。

だからダーウィンは発表することを躊躇したのだ。まさに、環境に適應しない考

えを持つ自分自身が淘汰されることを恐れて。

でも、今や進化論はあたりまえになっている。ありえないって思われてたことが、常識になっている。ダーウィンもウォレスも、当時の研究者たちはみんな、自分を信じて、学び続けて発表し続けて……。

自分を取り巻く環境のほうを変えたんだ。

右手に載った飛行機（注 小町さんに貰ったフェルト素材のぬいぐるみ）を眺める。

百六十年前の人たちに、こんな乗り物があるって話しても誰も信じないだろう。鉄が飛ぶはずないって。そんなものは空想の世界の話だって。

俺も思っていた。

俺に絵の才能なんてあるわけない、普通に就職なんてできるはずない。

でもそのことが、どれだけの可能性を狭めてきたんだろう？

そして左手には、土の中に保管されていた高校生の俺。四つ折りにされた紙の端をつまみ、俺はようやく、タイムカプセルを開く。

そこに書かれた文字を見て、俺はハッとした。

「人の心に残るイラストを描く」

たしかに俺の字で、そう書いてあった。

そうだったわけ……。ああ、そうだったかもしれない。

どこかでねじまがって、勘違いが刷り込まれていた。「歴史に名を残す」って書いてたと思い込んでいた。壮大な夢を抱いていたのに打ち砕かれたって。俺を認めてくれない世間や、ブラックな企業がはびこる社会が悪いって、被害者ぶって。でも俺の根っこ、最初の願いは、こういうことだったじゃないか。

丸めようとしていた俺の絵を、救ってくれたのぞみちゃんの手を思い出す。俺の

絵を、好きだって言ってくれた声も。俺はそれを、素直に受け取っていなかった。お世辞だと思っていた。自分のことも人のことも信じてなかったからだ。

3 十八歳の俺。ごめんな。

今からでも、遅くないよな。歴史に名が刻まれるなんて、うんと後のことよりも……それよりも何よりも、誰かの人生の中で心に残るような絵が一枚でも描けたら。それは俺の、れっきとした居場所になるんじゃないか。

(青山美智子『お探し物は図書室まで』〔ポプラ社〕より)

問1 傍線部1「背中がひょうつと冷たくなった」とありますが、この時の「俺」の気持ちとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア タイムカプセルに入れた、十代の頃に抱いていた無謀な夢を同窓生に見られ、馬鹿にされることを恐れている。

イ 現在は無職で何もできない自分が壮大な夢を抱いていたことを恥じ、己を買いかぶっていたことにぞつとしている。

ウ タイムカプセルに入れた封筒に糊付けしないような自分の詰め甘さが、今日の状況を招いていると思い、そんな自分を情けなく思っている。

エ 同窓生とはいえ、自分の抱えている夢が他人に知られることを想像して肝を冷やしている。

オ 世間知らずだった十代の自分を今では恥じており、昔の自分が暴露されることをかすかに不安に思っている。

問2 傍線部2「進化した大人」とありますが、それはどのような人たちを意味しますか。本文中の「進化」の意味を明らかにして、解答欄に合うように十字以上十五字以内で書きなさい。

「十字以上十五字以内」人たち。

問3 空欄Xに入る最も適切なことばを、X以前の本文中より五字以上十字以内で探し、書き抜きなさい。

問4 傍線部3「十八歳の俺。ごめんな」とありますが、ここで「俺」はなぜ「十八歳の俺」に謝っているのですか。その理由を説明した次の文に合うように、「A」は本文中より五字で書き抜き、「B」は十字以内、「C」は十五字以内でそれぞれ本文中のことばを用いて書きなさい。

「A 五字」を忘れ、「B 十字以内」ことができずに努力を怠り、そのことで「C 十五字以内」から。

問5 次の会話を読み、本文の内容についての発言として最も適切なものを選び、アルファベットで答えなさい。

Aさん…浩弥（俺）は、ダーウィンによって進化論の優先権を奪われたウォレスに自己を重ねています。けれど、その見方は、小町さんが指摘した通り根拠に乏しく、思い込みに過ぎないといえます。

Bさん…ただ、浩弥がウォレスを認めていることは確かです。この二人の関係は、ちようど浩弥の絵を好きだと言って居場所を与えてくれたのぞみちゃんとの関係思い起こさせますね。

Cさん…私は飛行機の発明と進化論の発表が、ちようど百六十年前になされたという共通点によって絶妙に結びつけられている点に感心しました。

Dさん…いずれにせよ、「人の心に残るイラストを書く」と思っていた浩弥が、苦労を重ねる過程で、そう思っていた自分の未熟さを自覚し克服した点に、この小説の最大の見所がありますね。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

教養は幸運なときには飾りであるが、不運のなかにあつては命綱となる。

このことばは、古代ギリシアの偉大な哲学者、アリストテレスが語ったと、デイオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』は伝えている。

「教養」と訳したのは、ギリシア語の「パイデア」ということばである。「略」「パイデア」は「子どもを育てること」であるから、「教育」という意味をもつ。ただ、古代ギリシアの人びとにとって「パイデア」は、教育制度や学校のシステムではなく「教え込む」教育、子どもからみれば「教え込まれる」教育ではなく、人間の自由な精神が自発的に学び、みずから身につける能力を意味した。「教え込む・教え込まれる強制的な教育」ではなく、「自由な人間が自ら身につけ学ぶ教養」を意味したのである。「飾り」となり「命綱」となる教養は、強制的に仕込まれたものではなく、人間の内面から輝く飾りであり、危機のときには自分の意思でそこから脱出しようとする自発性とともにあるからである。「略」

さて、「飾り」というのは、もとのギリシア語でいうと、「コスモス」である。「コスモス」には「宇宙」という意味と「秩序」という意味がある。また、「飾り」も意味する。「コスメティックス」といえば、化粧品である。人を美しく飾るもの、という意味である。

人びとが幸運な人生のうちにあるときには、教養は、人の精神を秩序づける。その**a ヒトガラ**を美しく飾る。ただ、人生は、自然法則に支配される自然現象と異なつて、幸運と不運のうちにある。同じ人間として生まれながら、富裕な家庭に生まれた子どもと貧困な家庭に生まれた子どもでは、「運不運」が違ふとわたしたちは言う。わたしたちは、自分の人生の「生まれ」を選択することはできない。

わたしたち人間が生きているということは、この地球上に命を与えられ、その命を維持していくということの意味している。生まれるということは、命を与えられるということである。与えられるということは受け身である。わたしたちは自らの誕生を選択することはできないからである。

他方、わたしたちは命をつなぐために、たくさんのことを選択する。「選択する」

ということとは、「選択肢をもつ」ということ、さらに、「選択することができる」ということも意味している。複数の選択肢のなかから選択することができるということは、選択の自由をもつということである。選択の自由があればこそ、わたしたちは、複数の選択肢から自らの意思でどれか一つを選ぶことができる。選択の存在こそ人間が自由であることの根幹に位置しているのである。

ただ、選択が望みの結果をもたらすかどうかは、選択の時点で分かっているわけではない。わたしたちは選択を誤ることもある。この場合の「誤る」は、数学の解答を誤るという意味ではない。正しい答えを出せなかったということではない。わたしたちは「正しい選択」というが、これは、数学の答えのような「正しさ」ではない。選択には、「よりよい選択」と「より悪い選択」、「どちらともつかない選択」がある。よりよい選択とは、わたしたちの願望の実現をもたらす選択、いわば幸福な状況をもたらす選択であり、そうでない選択が誤った選択、不幸をもたらす選択が悪い選択である。

さらに、よい選択をしたと思つても、選択の状況が変化するなかで不運が生じることもある。順調に進んでいた仕事が突然の地震で行き詰まつてしまうこともある。わたしたちは、こういう状況を運が悪いとか、不運だとかいう。

選択を誤ること、あるいは、不運に見舞われることで、わたしたちは困難な状況に陥る。困難な状況に陥つてしまうことの**b フンキ**点となつた選択のことを「選択を間違つた」とか、「選択が正しくなかった」、あるいは「選択はよかったが、運が悪かった」というのである。たしかに、「誤つた選択」「正しくなかった選択」は回避したい。不運な出来事に出会うことも喜ばしいことではない。が、そういう選択をすること、そのような状況を生きることができることもまた、人間が自由であるということに含まれている。

1 ここで命のように、「与えられているもの」を「所与」と呼ぶことにしよう。わたしたちは、与えられた命のもとで、すなわち、所与としての人生のうちにあって、選択する自由を与えられている。

所与と選択とが人間が存在するということの根本的な条件である。ただし、人生は、所与と選択だけによつて成り立っているわけではない。人生には、所与でもなく、選択でもない広大な領域が広がっている。遭遇という領域である。

わたしたちは、人生のなかで、さまざまな人びとや出来事に会う。遭遇する。この遭遇もまた「所与としての生きていること」と切っても切れない関係にある。所与をスタートとしてわたしたちの人生は進んでいくのであるが、そのなかでわたしたちはそれぞれにさまざまな人や出来事と出会うからである。しかし遭遇は所与ではない。選択でもない。

遭遇は選択ではないが、さまざまな遭遇は、他方でわたしたちにさまざまな選択肢を用意してくれる。人生の豊かさは、この所与と遭遇によって用意される選択のなかにある。いろいろな人と出会い、いろいろな出来事に会う。人との遭遇、出来事との遭遇によってさらにさまざまな選択肢が現れてくる。そのなかの選択によって人生は変化してゆく。選択によって出会うさまざまな人や出来事や風景が人生の**C**彩りとなる。

ただ、遭遇もまた、時として、さまざまな困難な状況をもたらす。自然災害との遭遇もあり、危害を及ぼす人間との遭遇もある。そうした遭遇で迫られる選択に失敗すれば、その結果は不幸な結果になることもある。死に至ることもある。

社会に秩序が存在し、平和を維持している時代にわたしたちが生まれたとすれば、そのような状況もわたしたちの「所与」ということができる。そのような時代であれば、人びとは心安らかに暮らすことができるようにみえる。

しかし、そのような時代にも、人は時として困難な状況に遭遇する。戦争がなくとも、人びとの間には対立や紛争があつて、ときには暴力に至る。DV（ドメスティック・バイオレンス）といわれる家庭内暴力や「いじめ」もある。

命の危機に遭遇することは不幸なことであるが、幸運に恵まれるだけがよい人生ではない。むしろ、さまざまな困難を克服すること、そのような克服を実現するための賢い選択を行うことこそが人生を豊かにする。困難な状況にあつてこそ、人間は賢い選択をすることができからである。

命にかかわる危機のなかで何が人を救うことができるだろうか。アリストテレスの「教養は幸運なときには飾りとなるが、不運のなかにあつては命綱となる」ということばで、わたしがあえて「命綱」と訳したのは、ギリシア語の「カタフィゲール」ということばである。アリストテレスは、幸運なときの「コスモス（飾り）」と不運なときの「カタフィゲール」を対比させた。カタフィゲールは、文字通り

には、「避難所」である。「避難所」は、危機のときに身を守る場所であるが、2いざというときに身を守る力になるという意味では、むしろ「命綱」と言った方がいいと思う。これは、ほかの人が守ってくれる力という意味ではない。自らの心のうちにあつて、自分を守る力である。アリストテレスはそれが教養だということである。〔略〕

わたしが理工系大学で哲学を教えていたとき、理工系学生のもつべき教養の大切さを説く教授たちもたくさんいたが、その多くは、教養を3科学技術者が身に備えるべき「飾り」と考えていた。日本の科学技術者は、海外の学会に出席すると、懇親会のような交流の場で日本文化について質問を受ける。ところが、理工系の研究に専念してきた科学技術者、研究者は、日本文化の価値や意味についての問いに答えることも、あるいは自ら進んで紹介することも、自分の意見を述べることができない。とくに最近では、日本の文化について造詣のある海外の研究者も増えているので、質問も相当深い関心のもとに発せられる。

だから、「教養の大切さ」を感じた教授たちは、「学生には、教養を身につけさせなければならぬ。ただ、それは専門で、とんがった能力をもつことが前提であるが」という。つまり研究者として成功するためには高度な専門性を、そして、恥をかかないためには教養を、という考えである。このような意味での教養とは、理工系教育に加えるべき文系の知識である。科学技術の専門家であることに加えて、文化的教養人になることも大切だという思想である。

わたしは、教養の本質はもつと別のところにあると考えている。「飾りとしての教養」に対して、わたしは、現代の若者が身につけるべき教養は、枝葉や花としての教養ではないと思っている。それは、「人間の根」としての教養である。これは「命綱」に通じる思想である。

人間を一本の木にたとえるならば、その根っこにあたるのが教養である。〔略〕「教養は人間の根である」というのは、4 順風のなかにあるとき、その教養は、その人の幹と枝を育て、花を咲かせ、また、実をつけさせる。その人を美しく飾る。他方、人がさまざまな困難に遭遇するとき、その困難に打ち克つ力となって、その人を守る。

教養ある人は、よりよい選択をすることによって身を守ることができ、よりよ

い人生を実現することができる。よい選択をするためには、わたしたちは、まず目の前に現れてくる選択肢を選択肢として認識できなければならぬ。これができなければ、わたしたちは大切な選択肢を見逃^{みのが}してしまう。選択肢を選択肢として認識できる能力、複数の選択肢のなかから、よりよい選択肢、さらには最善の選択肢を選択するための能力、言い換えれば、最善の選択を支えるのが教養である。

(桑子敏雄『何のための「教養」か』〔筑摩書房〕より)

問1 傍線部 a・b のカタカナを漢字に直しなさい。また、傍線部 c の読みをひらがなで記しなさい。

問2 傍線部 1 「ここで命のように、「与えられているもの」を「所与」と呼ぶことにしよう」とありますが、「所与」をめぐる筆者の考え方として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア「所与」とは生まれながらに与えられた状況のことであり、人間が存在する根本的な条件である。

イ「所与」とは誕生に見られる受け身の状態を指しているが、それは成人になるにつれて自発的なものに変化していく。

ウ「所与」とは人生のスタート地点であるが、一方で人や出来事との出会いによっても付与^{ふよ}されることがある。

エ「所与」とは運不運に関わることであり、人間の力が及ばない広大な領域をも超越^{ちようえつ}している。

オ「所与」とは生まれる前から決められている運命であるが、人間はそれを変えることができる。

問3 傍線部 2 「いざというときに身を守る」とありますが、そのためにはどういう選択をすべきだと筆者は考えていますか。二十五字以上三十字以内で答えなさい。

問4 傍線部 3 「科学技術者が身に備えるべき「飾り」とありますが、ここでの「飾り」とはどういうものですか。ふさわしいことばを本文中から十六字で探し、最初の五字を書き抜きなさい。

問5 傍線部 4 「順風のなかにあるとき、その教養は、その人の幹と枝を育て、花を咲かせ、また、実をつけさせる」とありますが、それを簡潔に説明した一文を本文中から探し、最初の五字を書き抜きなさい。

問6 本文の内容と合致^{がっち}するものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 筆者はアリストテレスの「カタフィゲー」を「命綱」と訳すことによって、根としての教養の意味を強めている。

イ 海外の研究者は、日本の文化に深い関心を寄せているために高度な専門性を発揮^{はつき}できる。

ウ 選択によって生じる状況を所与のものとして受け入れることで、わたしたちはさまざまな人びとや出来事と遭遇することになる。

エ 遭遇によってもたらされた多様な知識を習得することで、人生が変化することがある。

オ 社会に秩序が存在し、平和を維持している時代であっても人びとの間には対立や紛争があり、それらと遭遇することは選択を誤ったと言える。

「以下余白」

